

Newsletter

2019.2.28

立教大学全学共通
カリキュラム運営センター

言語 B 継続学習促進の取り組み

～「学ぶ」から「使う」「理解する」へ～

全学共通カリキュラム運営センター言語系科目構想・運営チームリーダー
異文化コミュニケーション学部教授
細井 尚子

大学に入ってから学ぶ言語 B（ドイツ語・フランス語・スペイン語・中国語・朝鮮語）では、言葉を通して世界各地の文化・社会への興味・関心を深め、1年次必修科目の学習を終えた後に、継続して学習したいという気持ちを育むため、2016年度から継続して「世界を知ろう！」企画を展開しています。

言葉は思いや考えを形にしたもの。話者の思いや状況により、同じ言葉でも響きは異なります。実際に使われる生きた言葉に触れ、意味だけではなく、それが纏う心をも受け取れるようになれば…言語 B の各言語教育研究室では、各々の言語及びその言語の文化圏の特性を生かした企画を工夫しています。

〈過去の実施企画一覧〉

言語	企画内容	上映作品あるいはテーマ
ドイツ語	映画上映・解説	2016 『善き人のためのソナタ』（原題：Das Leben der Anderen） フロリアン・ヘンケル・フォン・ドナースマルク監督 2017 『辛口ソースのハンズー丁』（原題：Einmal Hans mit scharfer Soße） ブケット・アラクシュ監督
フランス語	映画上映・解説	2016 『屋根裏部屋のメリアたち』（原題：Les femmes du 6ème étage） フィリップ・ル・ゲイ監督 2017 『パリ 20 区、僕たちのクラス』（原題：Entre les murs） ロラン・カンテ監督 2018 『ル・アーブルの靴みがき』（原題：Le Havre） アキ・カウリスマキ監督
スペイン語	映画上映・解説	2017 『オリーブの樹は呼んでいる』（原題：El olivo） イシアル・ボジャイン監督 2018 『料理人 ガストン・アクリオ』（原題：Buscando a Gastón） パトリシア・ペレス監督
中国語	映画上映・解説(2016・2017) ドキュメンタリー番組放映・ 制作ディレクター講演(2018)	2016 『罪の手ざわり』（原題『天注定』）賈樟柯監督・脚本 2017 『唐山大地震』馮小剛監督・脚本 2018 NONFIX 『万家灯火ーボクが見た中国・結婚事情』関強ディレクター
朝鮮語	韓国留学生との交流会	2016 テーマ「教科書から何を学びましたか」「韓国の人の思いを知ろう」 2017 テーマ「どんなマンガが好きですか」 「韓国の学生はどうして英語ができるのですか」 2018 テーマ「格差・貧困問題を考える」

目次

言語 B 継続学習促進の取り組み	細井 尚子 (1)
各言語の取り組み紹介 ドイツ語・フランス語	新野 守広・石川 文也 (2)
スペイン語・中国語・朝鮮語	飯島 みどり・細井 尚子・石坂 浩一 (3)
授業探訪ー総合系科目・多彩な学び「舞踊論」ー	糟谷 里美 (4)
グローバル教養副専攻 新コース、テーマの紹介「Teaching Japanese as a Foreign Language」	丸山 千歌 (6)
2018 年度全学共通カリキュラム運営センターの主な活動	(7)

各言語の取り組み紹介

ドイツ語

ドイツ語教育研究室主任 新野 守広

多くの移民・難民を迎えた 21 世紀のヨーロッパは日々刻々変化しています。EU を担ってきたドイツも、今、変貌の時を迎えています。こうしたドイツの生の姿を学生に伝えるために、2016 年度と 2017 年度にそれぞれ以下の映画の上映会を行いました。

- 2016 年度『善き人のためのソナタ』

1989 年にベルリンの壁が崩壊し、東西に分断されていたドイツは再び一つになりましたが、分断の傷跡は今でも多くの人々の心に残っています。冷戦時代の東ドイツでの諜報活動の実態を描いた 2006 年の本映画は、ドイツのみならず、世界中の人々の心を打ち、第 79 回アカデミー賞外国語映画賞を受賞しました。

- 2017 年度『辛口ソースのハンズー丁』

世代交代の進むトルコ系移民の若い世代が、恋愛・家族・キャリアなどの人生のステップごとに直面するドイツ社会での生きづらさや複雑さをコメディ・タッチで描いた 2013 年の本映画は、複数の文化を生きる人々の豊かさを訴えました。

ドイツ語圏の国々の等身大の姿を伝えられるように、今後も素敵な作品を紹介していこうと考えています。



2017 年度企画ポスター

フランス語

フランス語教育研究室主任 石川 文也

フランスは、映画誕生にかかわった重要な国のひとつです。いまから約 120 年前に、現在の映画の撮影機・映写機の原型となる「シネマトグラフ」を開発し、世界初ともいわれる映画館での上映をおこなったのはフランス人のリュミエール兄弟です。その後、映画は芸術として確固たる地位を築き上げ、「第七芸術」と呼ばれるようになりました。映画は、現在でも、フランス文化を代表する重要な芸術のひとつです。フランス語教育研究室では、そのようにフランス文化の代名詞といえる映画の中から、これまでに、日本でも人気の高かった以下の映画を選び、上映会を企画・実施してきました。

- 2016 年度：「屋根裏部屋のマリアたち」（監督：フィリップ・ル ゲイ 2010 年、セザール賞助演女優賞受賞）
- 2017 年度：「パリ 20 区、僕たちのクラス」（監督：ロラン・カンテ、2008 年、第 61 回カンヌ国際映画祭パルム・ドール受賞）
- 2018 年度：「ル・アーブルの靴磨き」（監督：カウリス・マキ、2012 年、第 64 回カンヌ国際映画祭コンペティション部門プレミア上映）

これらは、フランス社会の光と影を浮き彫りにした作品、あるいは人間関係をフランス独特のシニカルなタッチで、ユーモアを交えて映し出した作品です。上映会参加者のみなさんからもこれらの映画の上映を高く評価してもらっています。そのような映画の上映が、フランス語圏の社会をよりよく知り、またフランス語履修者の継続学習の切っ掛けとなるものと考えており、今後も同様に、素晴らしい作品を紹介していく予定です。



2018 年度企画ポスター

スペイン語

スペイン語教育研究室主任 飯島 みどり

幸か不幸か広大なスペイン語圏。日本語社会が陥りがちな「言語＝民族＝国家」観から自由になり、世界の複雑さを学ぶのによってつけの存在である。ただ近年、地理・歴史・音楽・美術などの分野を通じて高校時代までにこの世界と親しむ機会は減っているのではないか。サッカー好きの関心も内向きのきらいが見える。

そこで2018年度、スペイン語教育研究室はペルー出身の料理人ガストン・アクリオに光を当てる記録映画を両キャンパスで上映した。食という人間誰しも避けて通れない営みからスペイン語圏と世界の豊かに触れてほしいと考えたわけである。何年か前のことだが、キムチをよく食べるはずの学生が唐辛子を知らないというので驚いた筆者の経験も背景にある。自分の口に入るものを知ることは自分の身を守ることでもあるだろう。

残念ながら、純然たる「スペイン映画」を上映した前年より参加学生数はやや絞られたが、池袋では上映後ペルー人留学生に補足をしてもらい活発な質疑のひとときを持てた。また新座では、食文化の講義で紹介された、とスペイン語を履修しない学生も来てくれた。もちろん大歓迎。ベンガクやタイを離れ、生活の場から「ことば」への接近を図れる機会を目指したい。



2018年度企画ポスター

中国語

中国語教育研究室主任 細井 尚子

大学入学後に発音から学ぶ初習言語は、どうしてもテキストを中心に学習が進む。すでに学生が日々の生活の中で中国語母語話者と出会う機会は少なくはないのだが、それでも自分たちが学んでいる中国語を使う人々の暮らしや考え方などを知識としてのみならず、感覚でも受け取れる機会は多くはない。中国語教育研究室では継続学習促進企画である「世界を知ろう!」を、言葉の向こうにいる人々・ある世界を知る機会として活用したいと考えた。

初年度の『罪の手ざわり』(原題『天注定』賈樟柯監督・脚本/2013年)は、優れた作品なのだが「恐い国ですね」という感想があり、中国について理解が浅い学生にとってはやや不親切な選択であったと反省、二年目はヒューマンなものをと『唐山大地震』(馮小剛監督・脚本/2010年)を上映した。初年度よりは受け入れやすかったようだが、古い・重いという声もあり、3年目には現在の中国を描いたドキュメンタリー作品「万家灯火ーボクが見た中国・結婚事情」の上映とディレクターの関強氏、本学兼任講師の秋山珠子氏のトークを行った。アンケートから見ると、3年目にしようやく「ねらい」に合った形を作れたようである。



2018年度企画ポスター

朝鮮語

朝鮮語教育研究室主任 石坂 浩一

朝鮮語では2016年度から「韓国留学生と語ろう」、通称「留学生と語る会」を1年に1,2回、「世界を知ろう!」の企画として行なっている。韓国の留学生と出会う場はいくつかあろうが、何かテーマをもって話す場は意外にないように思われる。そこで、日本人学生の卒論テーマに合わせ、「韓国の学生はどうして英語ができるのですか?」「どんなマンガが好きですか?」などをテーマにして話し合った。いちばん最近の2018年11月27日には第5回として「格差・貧困問題を考える」をテーマに、今回は新座の大学院に在籍する韓国人留学生が発題をした。硬いテーマにもかかわらず、活発な議論ができた。毎回参加者は20人前後と多くはないが、朝鮮語を学習する学生も未履修の学生もいて、留学生と話す機会があまりないという学生たちが集まることで意味のある場になっているのではないかと。なお、新座キャンパスでは朝鮮語教育研究室のバックアップで週に1回、韓国人留学生とランチタイムに対話をする会も日常的に行なっている。より日常的で開かれた場を通じて、日韓が一層近くなり、言葉を身に付ける学生が増えるように努力していきたい。



2018年度企画ポスター

【授業探訪】

全学共通カリキュラム運営センターでは、FD 活動として多くの授業改善活動に取り組んでいます（本紙 7-8 頁参照）。これらの FD 活動を通じて、授業の実践事例についてもっと知りたい、聞きたいという声が科目担当者より数多く寄せられてきました。そこで、「授業探訪」コーナーを新設しました。本コーナーでは、全学共通科目で展開されているさまざまな授業の実践事例を紹介していきます。ぜひご一読ください。

2018 年度秋学期総合系科目・多彩な学び「舞踊論」

担当：糟谷 里美（兼任講師）

1. 授業の概要

全カリの【多彩な学び】の科目に位置付けられている《舞踊論》は、社会における多種多様な舞踊を取り上げ、現象としての舞踊を理論的に捉えることにより、さまざまな視点から身体文化の 1 つである舞踊の意味を探究する力を涵養することをねらいとしている。

その内容は、地域に根差した文化や舞踊家たちの芸術活動の背景に触れながら、そこに出現するさまざまな舞踊に着目し、関連する研究の成果等を紹介し考察しながら、舞踊への理解を深めていこうとするものである。

2. 授業の特色

この授業は、「舞踊とは何か」という問いかけを常に念頭に置きながら、歴史的・社会的背景を踏まえた上で、舞踊家の思想、作品のテーマ、舞踊の社会的影響、民族的文化的特徴、舞踊の必要性などを考察していくことを目指している。そのためには、作品の全体像を捉える必要があると考え、1 つひとつの作品（映像）をできる限り、授業時間内にすべて観てもらおうようにしており、これが最大の特色であるといえるだろう。作品やその製作現場のドキュメンタリーには、振付家の演出の工夫や、舞踊家や舞踊作家の人となり、生き様などが散りばめられており、解説を加えながらそれらを鑑賞してもらうことで、部分的な作品紹介や写真等では得られにくいさまざまな様相を、多角的・複眼的に理解してもらいたいと考えている。

3. 授業の工夫

1) 教材を選りすぐる

14 回の授業時間の中では、限られた作品しか紹介できないため、学期前半にはできるだけ分かりやすい（表情や身振りで容易に意味が理解でき、舞踊を身近に感じられる）ものを、後半にやや難解な（思考力や感性が必要とされる）ものを提示し、初歩的な知識獲得から深い考察へと学生の思考力を段階的に開拓でき得るものを選んでいく。また誰もが聴いたことのある、あるいは演奏したことのある音楽（クラシックやポップス等）を用いている作品は、さまざまな分野の学生の興味をそそぎ、彼らの集中力や意欲を保つ上では、欠かせない教材となっている。

2) 「既知」という先入観を取り払う

授業の中では、専門の分野では当然のことでも、分野が異なれば初めて出会う内容、耳慣れない・使い慣れない言葉が出現する。それらが十分に理解できないと、学生はその先の内容を把握できず、授業をつまらなく感じたり、理解することを止めてしまったり、という負のスパイラルが生じる恐れがある。これを回避するために、些細な言葉であっても、丁寧な説明を付け加えるようにしている。また、リアクションペーパーに記されたちょっとした疑問に回答していくことも、学生の積極性を引き出す術となる。「既知」のことという先入観を取り払い、さまざまな物事を「未知」あるいは“うろ覚え”の言葉や概念として説明を加えると、学生は確信や新たな発見を得て、授業の理解が進み、やや難解な内容も面白い、楽しいと感じるようになるだろう。

3) 音量や教室の明るさを適宜調整する

授業では、多くの映像資料を見せるが、それらはデジタル映像のみならず、古いVHSや、30年以上前のテレビ番組を録画したVHSをDVDに焼き直したものなどもあり、画質や音質がすべて良いわけではない。映像が見えにくかったり、音量が適切でなかったりすることは、学生の集中力を低下させる要因となるだろう。したがって、教室内の明るさや、マイクや映像資料の音量は、授業内でも必要に応じて随時調整し、学生が視覚や聴覚をフル活用して、映像から得る情報によって考察を深めることができる環境を保つよう努めている。

4) 伝えるための話し方 ～アナウンサーのような声色・話すスピードを目指して～

授業運営において、最も重要なポイントと思われるのは、「伝えるための話し方」である。特に大教室で200人前後の学生を対象とした授業の場合、教室の隅々まで伝わるような声色と適切なスピードが必要であると考えている。NHKのアナウンサーは、400字（原稿用紙1枚）を1分で読むそうだ。明確な声、適切な抑揚と“間”、速すぎず遅すぎないスピードが求められる。実はここだけの話ではあるが、授業で話すことを事前に言葉に出して練習してから、授業に臨むようにしている。そうすると、学生への説明が明確になるのみならず、授業の中で説明にかかる時間を把握でき、映像資料に割ける時間も自ずと分かり、授業運営がスムーズに遂行できるというメリットもある。

4. リアクションペーパーからの提案

リアクションペーパーは、自身の授業について振り返る材料をたくさん提供してくれる重要なものである。

授業方法について、「系統図があった方がよい」といったコメントは、学生が何を知りたいのか、どのような資料を必要としているのかを示唆するものであろう。一方、「ヒントだけ与えられて、私たち次第でさまざまな視点を持たせてくださる先生のスタイルがとても良かった」という、断定的な説明や資料の回避を肯定的に捉える学生もいる。

全学部共通の科目であるがゆえに、学生のこれまでの経験や興味・関心によって、授業に求められるものが多様であることは否めない。しかし、すべての学生がある程度納得のできる内容・方法や教材・資料を精査していくことは、授業のねらいを学生に伝えていくために、必要不可欠であると感じている。

5. おわりに

リアクションペーパーに、「自分の中で“ダンスの概念”がとても大きく変化した」「今後他のことを学ぶ時には、色々な視点から考えていこうと思う」といったコメントがあると、この授業の目標が達成されていることを認識でき、素直にうれしいものである。また、授業に対する次のコメントは、全カリという教養科目ならではの醍醐味を感じさせるものである。

「授業全体を通してとても多くのものや新しい価値観を手に入れたように思います。」

「踊りのことだけではないものも学べた気がしています。」

「舞踊論を通して、私も自分自身を見つめ直すきっかけになりました。」

「人が輝く、心の底から好きといえるものに向ける熱意には何もかなわないのかもしれない。それをこの舞踊論から教わった。」

このようなコメントが得られたのは、20年以上にわたり大学教育の柱の一つとして築き上げられてきた全学共通カリキュラムの多種多様な授業によって、学生が柔軟な思考力を獲得してきた結果であると考えられる。また、全く関心のなかった分野の授業でさえ、柔軟な思考力を以って受講し、考え、何かを発見し、活かしていく、という全カリにおける学生の姿は、大学教育本来の姿を体現しているともいえるだろう。このような学生の姿勢やコメントから、全カリという教養科目の重要性を再認識することになるとは、思いもよらなかったが、今後も学生一人ひとりの思いに寄り添いながら、授業の改善を図り、《舞踊論》の授業を深化させていきたい。

グローバル教養副専攻 新コース、テーマの紹介

「グローバル教養副専攻」は、所属する学部学科や専修の専門性に加えて、これからの社会でより必要とされる知識やスキルを身に付けるため、自らの興味・関心に沿って学部横断的に学んでいく教育プログラムです。2018年度より新たに学部や学内諸機関が提供する科目を中心に構成するディシプリンコースが設置されました。今号では、その中の一つ「日本語教育」をテーマにしたコースを紹介します。

ディシプリンコース Teaching Japanese as a Foreign Language

異文化コミュニケーション学部教授 丸山 千歌

◆ 海外の教育機関での日本語教育インターンシップ

このコースは第3系列/海外体験の「海外インターンシップ (CIC)」で海外の日本語教育の現場に入って実践することを一つの目標に据えて、外国語として日本語を教えるための方法、教材作成法、教室管理、学習者特性による日本語教育などについて実践的に学びます。実践に向かう第1系列、第2系列での学習で、日本の社会・文化について発信する準備、日本語を紹介する準備をして、第3系列/海外体験の学習に臨みます。

海外で日本語教育の現場に立つ機会を持つからこそ得られる出会い、気づき、学びの可能性はいくつもあります。日本語教育に関心がある学生はもちろん、日本の社会や文化に関する情報を発信することに関心がある学生、海外で生きていくことに関心がある学生はぜひ挑戦してください！

Discipline Courseについて			
履修モデル: <テーマ>Teaching Japanese as a Foreign Language *1,*2			
系列	科目	使用言語	必要単位数
第1系列	Japan Study Program A, C, D	日本語	4単位
第2系列	日本語学概論A, B 日本語学特論 日本語教授法A, B	日本語	10単位
第3系列	海外インターンシップ (CIC) *3	外国語	2単位
海外体験	海外インターンシップ (CIC) *3 (修得した単位は、第3系列の単位数に含める)	外国語	認定
修了に必要な総単位数			16単位
<small>*1 異文化コミュニケーション学部所属する学生は、Teaching Japanese as a Foreign Languageをテーマ登録することはできない。 *2 外国人留学生が、Teaching Japanese as a Foreign Languageをテーマ登録する場合は、日本語プレシメントテストでJ8以上であることが必要。 *3 「海外インターンシップ (CIC)」の履修にあたっては、日本語学概論A, B、日本語教授法A, Bの単位修得済であることが履修資格となる。</small>			

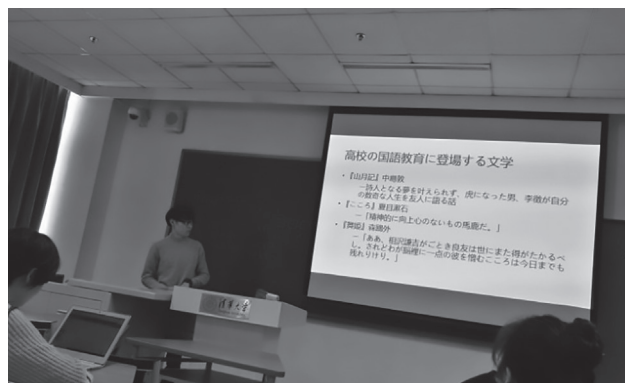
◆ Teaching Japanese as a Foreign Language : 「これから」を拓く学生に

昨年の終わりに入管法が改正され、学生の皆さんは、今後、日本国内でもさらに多くの外国人と向き合う時代を生きていくことがはっきりとしてきました。日本語教員養成・研修のありかたも、国レベルで鋭意見直しが進んでいますが、その報告書から見える日本語教員に求められる資質 (知識、技能、態度) は、決して「日本語教育」にとどまりません。これからの時代を生きる人材に共通に求められるものが多くあります。

海外インターンシップでは、現地の教育現場を支えるメンバーの一人として、与えられた役目を果たすことが期待されます。現場に真摯に向き合い、柔軟に対応することで、キャンパスや学生、見える風景が変わります。皆さんが自身の将来について考える、有意義な機会にもなるでしょう。



「海外インターンシップ」モンゴル文化教育大 (モンゴル) にて



「海外インターンシップ」清華大 (中国) でのプレゼンテーション

2018年度 全学共通カリキュラム運営センターの主な活動

* 2019年2月現在。3月に開催されるものについては全て予定です。

<言語系科目構想・運営チーム>

①英語教育研究室

- ・4月4日(水) ディスカッションクラスオリエンテーション
(池) 太刀川記念館カンファレンス・ルーム
9:00～10:00
- ・4月6日(金) 新任教員オリエンテーション
(池) 14号館D201教室 11:30～12:00
- ・4月6日(金) 春学期FDセミナー
(池) 14号館D201・D301教室 13:30～15:30
- ・4月6日(金) 英語eラーニングオリエンテーション
(池) 8号館8501教室 16:30～17:30
- ・12月8日(土) 秋学期FDセミナー
(池) 7号館7102教室 13:30～15:30
- ・12月15日(土) 第19回大柴杯スピーチコンテスト
(池) 5号館5121教室 14:00～16:00
- ・1月31日(木) FDワークショップ
(池) 7号館7201教室 10:00～14:30
- ・1月7日(月)～23日(水)
英語必修科目カリキュラムアンケート実施
実施数:約4,800枚
- ・英語力伸長度測定テスト(TOEIC IP)実施
1年次対象:春学期(プレイメントテスト)4月2日(月)、秋学期12月1日(土)
2～4年次対象:春学期 4月14日(土)、秋学期12月8日(土)

②ドイツ語教育研究室

- ・7月23日(月) 春学期担当者連絡会
(池) 11号館A101教室 16:30～18:00
- ・2月25日(月) 秋学期担当者連絡会
(池) 11号館A101教室 16:30～18:00

③フランス語教育研究室

- ・7月6日(金) 春学期担当者連絡会
(池) マキムホール会議室 17:00～18:30
- ・12月15日(土) 秋学期担当者連絡会
(池) マキムホール会議室 15:30～17:30

④スペイン語教育研究室

- ・7月30日(月) 春学期担当者連絡会

(池) 12号館会議室 18:30～21:00

- ・1月30日(水) 秋学期担当者連絡会
(池) 太刀川記念館第2会議室 18:30～21:00

⑤中国語教育研究室

- ・4月2日(月) 春学期担当者連絡会・FD
(池) 16号館第1会議室 11:00～13:00
- ・9月18日(火) 秋学期担当者連絡会・FD
(池) 5号館会議室 16:00～18:00

⑥朝鮮語教育研究室

- ・7月23日(月) 春学期担当者連絡会
(池) 太刀川記念館第2会議室 18:00～20:20
- ・1月29日(火) 秋学期担当者連絡会
(池) 太刀川記念館第2会議室 17:30～20:00

<総合系科目構想・運営チーム>

- ・4月5日(木) スポーツ実習科目担当者連絡会
(池) ポール・ラッシュ・アスレティックセンター
4階 16:00～17:00
- ・6月22日(金) 全カリサポーター会議
(池) 12号館第1・2会議室
(新) 5号館6階会議室 18:30～19:30
- ・7月20日(金) 2018年度第2回総合系科目担当者連絡会
(池) 11号館A203教室 17:30～19:00
- ・2月22日(金) 2019年度第1回総合系科目担当者連絡会
(池) 11号館A203教室 17:30～19:00

<オリエンテーション>

- ・4月10日(火) 新任教員対象オリエンテーション
(主催:人事課)
「全カリについて」 水上 徹男(全カリ部長)
- ・3月29日(金) 2019年度着任教育講師対象オリエンテーション
(主催:ランゲージセンター)
水上 徹男(全カリ部長)

<授業評価アンケート関連>

①言語系科目構想・運営チーム

【報告書関連】

- ・「2017年度授業評価アンケート報告書」作成
(2018年12月発行)

【2018年度「授業評価アンケート」関連】

- ・「授業評価アンケート」実施
(2018年度秋学期科目対象)
1月7日(月)～23日(水)
実施科目数：229科目

②総合系科目構想・運営チーム

【報告書関連】

- ・「2017年度学生による授業評価アンケート学部等総評」の作成
- ・スポーツ実習「2017年度秋学期授業評価アンケート集計結果」作成
- ・スポーツ実習「2018年度春学期授業評価アンケート集計結果」作成

【2018年度「授業評価アンケート」関連】

- ・「学生による授業評価アンケート」実施
実施科目数：春学期196科目、秋学期180科目、計376科目
- ・「スポーツ実習授業評価アンケート」実施
実施科目数：春学期61科目、秋学期約64科目(予定)

<学会・シンポジウム参加>

- ・6月9日(土)・10日(日)
大学教育学会第40回大会(筑波大学開催)
統一テーマ「AI時代を生きるための教養教育」
宇野 裕樹(全カリ事務室)
- ・12月1日(土)・2日(日)
大学教育学会2018年度課題研究集会(長崎国際大学開催)
統一テーマ「多様な学生が学び、共に成長するキャンパスへ国際社会にひらかれ、未来を創る大学の実現」
大谷 美希(全カリ事務室)

全カリニュースレター No.45
印刷 2019.2.28 発行 2019.2.28
発行人 水上 徹男
編集人 松山 伸一、師岡 淳也
発行所 立教大学 全学共通カリキュラム運営センター
印刷 立教プリンティングステーション

<シンポジウム>

テーマ：「全カリ」の意義と役割を改めて考える
—総長「全カリ」を語る—

日時：11月22日(木) 18:30～20:00
池袋キャンパス 7号館7102教室

登壇者：

郭 洋春 氏(総長/経済学部教授)
佐々木 一也 氏(前全カリ部長/文学部教授)
水上 徹男 氏(全カリ部長/社会学部教授)

(司会)

田中 秀和 氏(全カリ総合チームメンバー/理学部教授)

*本シンポジウム筆録は「大学教育研究フォーラム」第24号(2018年3月発行予定)に掲載



～グローバル教養副専攻に 関するお知らせ～

2019年4月より、登録年次・コース登録期間が
変更になります！
(既に登録したコースも変更可能です。)

- 1) コース登録可能年次
変更前：2年次春学期から
変更後：1年次春学期から
- 2) コース登録期間
変更前：春学期4月下旬～7月31日
秋学期10月1日～1月31日
変更後：4月上旬～1月31日

※詳細は2019年度履修要項をご確認ください。
グローバル教養副専攻 Web サイト
<http://s.rikkyo.ac.jp/rmp/>